

Title	中国語の形態素
Author	望月，八十吉
Citation	人文研究. 17 卷 4 号, p.343-355.
Issue Date	1966
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

中国語の形態素

望 月 八十 吉

この論文は、中国語の形態素について、文法的観点から（語彙学的観点からではなく）考察するものである。形態素（および音素）という基本的単位が言語に存在すること、あるいは少くとも、そのまぎれもない有用性を、多くの言語学者が認めている。〔註一〕

形態素の定義も単語の場合と同様に、なかなか下しにくいが、ここでは一応次のように定義しておく。

同一の、あるいは類似した意味をもつ、それ以上分割できない言語要素を形態素と言う。

「意味」という語の意味は曖昧であるが、いまは問題にしない。「類似した意味をもつ」としたのは、もし意味が少しでも異なれば異なる形態素とする、ということになれば、形態素の数は膨大なものとなり、收拾がつかなくなるからである。

ところで、形態素と単語との関係であるが、一つの形態素が、あるいは、複数の形態素が集まって、一つの単語を構成するといった、量的関係だけではなさそうである。単語は心理的存在であり、いわば勘でわかるものであるのに反して、形態素は、話し手あるいは聞き手の意識にはなく、反省を加えることによって、はじめてその存在が意識されるもののように思われる。〔註二〕つまり、両者は「量」的段階を異にするだけではなく、「質」的な相異があるように思われる。

二

ある言語の（一で定義されたような）形態素が、かりに次のようであるとしたら、形態素の認定は簡単である。

- 1 ある一つの音素、あるいは、ある一つの音素連続は、かならず、ある一つの形態素だけを構成する。
 - 2 ある一つの形態素は、かならず、ある一つの音素、あるいは、ある一つの音素連続だけによって構成されている。
- しかし、このような言語はなさそうである。中国語の形態素も、このような状態ではなく、次のような状態にあると考えられる。

- 3 ある一つの音素、あるいは、ある一つの音素連続が、二つ以上の形態素を構成している場合がある。
 - 4 ある一つの形態素が、異なった単独の音素、あるいは、異なった音素連続として現われることがある。
- 3の場合が中国語に多いのは、中国語では結果的に、単音節形態素が複音節形態素に比べて圧倒的に多いにもかかわらず、音節構造が簡単で、その種類が少ないことに原因がある。また、中国語では原則として「音節」という音声的単位が意味的単位と一致するから、単音節形態素が圧倒的に多いことと相俟って、形態素認定の手順をいちぢるしく簡単にする。〔註三〕

右に述べた1乃至4は、概略的に次のように言いかえてよい。

- 1' 一つの音声形式は一つの意味だけを表わす。
 - 2' 一つの意味は一つの音声形式だけによって表わされる。
 - 3' 一つの音声形式が複数の意味を表わすことがある。
 - 4' 一つの意味が複数の音声形式で表わされることがある。
- つまり、音と意味との関係を言っているのであるが、この音と意味とを、もう少し複雑にかみ合わせると、次のような

図ができる。

音	意		
	同	じ	関係あり
同	①	④	⑦
関係あり	②	⑤	⑧
関係なし	③	⑥	⑨

(一) 図

右に述べた1'と2'は、この図の①に当たり、3'は④と⑦に、4'は②と③にそれぞれ当たる。⑦⑧⑨は、意味に関係がない(つまり意味がまったく異なる)のであるから、当然、異なる形態素ということになる。この図は、中国語の形態素を考える場合に、非常に有用と思われるので、以下、必要に応じて引用することにする。

三

まず二で述べた4について考察を進めてみよう。この場合、形態素はいくつかの異なった形で現われるわけであるが、厳密に言えば、形態素と音素の間に直接の関係は存在しない。このことは、次の三つの命題間の関係を考えてみれば明らかである。

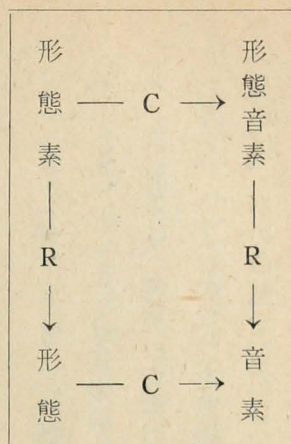
イ /pai/ (牌) と /pa/ (「牌兄」の「牌」) は同一形態素である。〔註四〕

ロ /pai/ と /pa/ は音素論的 (phonemically) に異なる。

ハ 形態素は、特定の音素の特定の配列よりなる。

このうち、いずれの二つを前提としても、残りの一つと矛盾する。〔註五〕つまり、/pai/ と /pa/ を同一形態素だと言いたいならば、ハの命題を否定しなければならない。このような矛盾を埋めるために、形態 (morph) あるいは形態音素 (morphophoneme) という要素が使われるのである。そして、形態素・音素・形態・形態音素の関係は次の図のようにな

る。〔註六〕



(二) 図

この図で、Cは「成り立っている」(is composed of) という関係を表わし、Rは「表わされる」(is represented by) という関係を表わす。「成り立っている」というのは、全体と部分との関係にあるということで、いわば同じ平面の上で、大きな段階を異にするということである。「表わされる」というのは、この場合、抽象の度合いや階層を異にする要素と要素との間における関係である。このように見てくると、形態音素とか、形態とかいうものは、前述三命題間の矛盾を解決するための、中間ステーションであることがわかる。もちろん、このような二段構えの記述法(形態素と音素とを直接結びつけない記述法)は、記述上の便宜のためであって、絶対にそうしなければならない、といった性質のものではない。こうする方が便利であり、記述が簡潔になるだけであるが、言語の記述においては、首尾一貫性・網羅性が必要なことは自明のことであるが、簡潔性も重要な要素である。

次に、中国語に4に当たるケースとして、どのようなものがあるかを考えてみよう。

三・一 「兒化」 北京語の韻尾は、 /-ə/ , /-i:/ , /-u:/ , /-n:/ , /-ŋ/ だが、 /-i:/ は /-i:/ の韻尾および /-i:/ とだけ交替し、 /-u:/ および /-ŋ/ とは交替しない。〔註七〕これはまったく規則的であって例外はない。この点、日本語の次のような音韻脱落現象とは性質を異にしている。

河原 kawahara \rightarrow kawara

河幅 kawahaba (変化なし)

つまり、中国語では /-i:/ と /-r/ とが連続しないという音素配列上の制限があるのである。この「兒化」は「自動的交替」(「自動的交替」はつねに「音韻論的に条件づけられた交替」である)であり〔註八〕、兒化前の形式(form)と兒化

後の形式との関係は、図一の②に当たる。もし、この②の場合でも同一形態素と認定しないならば、言語の記述に当って不必要な繰り返しが非常になるから、当然、同一形態素とした方がよい。

次に、このような形態素をどのような方法で記述したらよいか、を考えてみよう。もし、形態法を採用して、例えば

{pai} (牌) には /pai/ と /pa/, {hai} (孩) には /hai/ と /ha/, …… という二つの異形態〔註九〕があり、同様に、{men} (門) には /men/ と /me/, {dian} (点) には /dian/ と /dia/ …… という二つの異形態がある。

というように、接尾辞「兒」を伴い得る形態素で、韻尾が /ɿ/ と /i/ のものすべてに、二つの異形態を認めていったのでは、繁雑さに堪えられない。そこで、形態音素法を採用して、例えば

{播} という形態素は m/pa/ という形態音素から成り、 m/pa- は、音素的には常に /pa-/ で表わされ、 m/i/ は、{兒} が接尾するときには、音素的に /i/ で表わされ、それ以外の場合には、音素的に /ɿ/ で表わされる。{門} という形態素は…… (以下同様)。

というように記述してもかなり繁雑である。なぜなら、「兒」を伴い得る形態素で韻尾が /ɿ/ と /i/ のものすべてに、後続条件の如何 ({西} が接尾するかどうか) によって、音素的にどうなるかを註記しなければならないからである。そこで

{西} という形態素には、/ɿ/ と /i/ という異形態があり、後者は、韻尾が /ɿ/ あるいは /i/ の形態素と結び、しかもそれらの韻尾と /ɿ/ が交替する。前者はそれ以外の形態素と結ぶ。

と記述すれば、先行形態素の一々について、(形態法をとる場合、形態音素法をとる場合のいずれを問わず) 出現の条件を註記しなくてもすみ、記述を簡潔にするばかりでなく、「兒化」現象の規則性を明示することができる。これは {西} について形態法を適用したのであるが、次のように

{兒} という形態素は m/R/ という形態音素から成り、音素的には /ɿ/ である場合と /i/ である場合があり、後者は…… (以下、形態法の場合と同じ)。

のように、形態音素法によっても、簡潔な記述・規則性の明示という点で、形態法によった場合との間に優劣はない。

三・二 「異読」 ここでは「異読」という語を、「同一の漢字を単独で発音した場合に、二つ以上の音が存在する現象」と解しておく。これは、意味の異同を基準にして、次の三種に分けることができる。

イ 意味にvarietyがない場合。例えば「誰」の /shui/ /shei/ という二つの音は、いずれも「だれ」という意味を表わす。
ロ 意味上関連があるが同一ではない場合。例えば「好」の /hao 3 世/ /hao 4 世/ という二つの音は、前者は形容詞的、後者は動詞的であって、意味が同一であるとは言えないが、関連性はある。

ハ 意味が異なる場合。例えば「行」の /xing/ /hang/ とくう二つの音は、前者は「おこなう」という意味であり、後者は「へ列」という意味である。

このうち、ハは図一の⑨に当たり、形態素の定義からして、当然、異なった形態素としなければならないから、ここでは問題としない。それから、「異読」というのは、同一の漢字について言われるのであるから、それらの二つ（あるいは二つ以上）の音は、歴史的になんらかの関係、例えば音韻変化の歴史を溯れば同一音に帰着するとか、同一単語家族に属するとかいった関係をもつものと考えられるから、図一の②⑤⑧のいずれかに属することとする。【註一〇】

まずイであるが、「誰」「躍」を自由変異の例として、「啊」を音素的に規定された変異の例として、「虹」「剝」を形態的に規定された変異の例として挙げることができる。いずれにしても、自由変異をなすが、相補的分布をなすかのいずれかであり、最小の対立をなすことはないから、まず同一形態素とすべきである。なおここで、異読の例ではないが、「看」「瞧」「瞅」などについて考えてみると、これらは、意味は同じだが音の面で関係がないから、図一の③に当たる。これらをどう処置したらよいかの決め手はないが、これらの形式の音の相異は、形態素以下 (sub-morphemic) と考えるには余りにも大きすぎるように思われるから、異なる形態素とするのが常識的である。図一の⑦も、③と同様に「同じ」と「関係なし」とが組み合っているのだが、この⑦は明らかに異なった形態素となるのであるから、全体の均衡をはかる意味

でも、③を異なった形態素とした方が妥当であろう。〔註一〕

次に、ロについて述べる。これは、本来「語の派生」の問題である。例に挙げた「好」について言えば、これは「声調変換」という手順による語の派生であり、また

傳… /chuan/ (動詞) — /zhuan/ (名詞) は、「声調変換」および「声母変換」という手順による語の派生である。これは

/guang/ (広) < 広い > — /kuak/ (拡) < 広くする >

のような、所謂「対転」の現象に平行するものであるが、ロの場合には、たまたま同一漢字で表記されているのである。このような語派生の手順は、現代語ではすっかり生産力を失ってしまっており、ロのような形で古代漢語の面影を残しているにすぎないのであるが、このような歴史的条件を考慮して、異なった形態素とするのが妥当である。同じように「意味に関係がある」といっても、名詞としての「点」と動詞としての「点」との関係は、ロの場合とは異なる。なぜなら、この二つの「点」は同音形式であるのに対して、ロの場合は音を異にしているからだ。「点」のような同音形式については後述する。

さて、表記法の問題であるが、イは「児化」とは異なって、「非自動的」な交替であり、規則性が認められないから、もし形態音素法を採用すると、他に応用のきかない非常に特殊な形態音素を設定しなければならず、ひいて記述の簡潔性を損なうことになるから、形態法の方が望ましい。ロの場合、異なった形態素になるのであるから問題は無い。

三・三 「声調」 中国語の声調は一種の「かぶせ音素」であり、形態素の示差的特性をなすから、形態素認定に当たって無視することはできない。

まず、三声について検討してみるが、三声に〔214〕〔35〕という二つの異音があると解釈するのはまずい。なぜなら、/35/ (二声) といつかぶせ音素が存在していて、三声と最小の対立をなすことがあるからである (例えば、「麻」と「馬」

。したがって、[214]と[35]を一つの音素にまとめることは、音素の定義からしていかにもまずいから、「註一二」やはり二つの音素としなければならない。そうすると、「うま」という意味をもった形式には、/ma³ 𪛗 /ma² 𪛗 /という二つがあることになるが、この二つを異なった形態素とするのはまずい。このような「連調変化」は図一の②に当たるが、同じように②に当たる「児化」の場合と同じ理由で、同一形態素とすべきである。〔註一三〕

次に、軽声について検討する。軽声も他の声調と同じように、一つの音素としなければならない。なぜなら、「嗎・啊・的……」などの助詞、「子・頭・了……」などの接尾辞は、軽声以外の声調をもっていないし、また、次のように軽声か非軽声かが、最小の対立をなす場合が、かなりあるからである。

大意(重重) へ大意 大意(重軽) へ油断する へ

報告(重重) へ報告 報告(重軽) へ報告する へ

助詞・接辞の場合とはともかく、後者は図一の②なのか⑤なのか、簡単には決められない。したがって、一つの形態素としたらいいのか、異なった形態素としたらよいかについては、すぐには結論を出しかねる。非軽声のすべての形式に、対応する軽声の形式が存在するのではないことも、問題を複雑にする一因である。表記法の問題であるが、とくに、基本形として三声をもつ形態素が、さらに軽声で現われる場合があるとすれば、その表記法は、はなはだ複雑とならざるを得ないので、これもここでは結論を出さないでおく。〔註一四〕

四

次に、二で挙げた3について述べるが、それは、同音形態についていかにして形態素認定を行なうか、という問題である。同音形態についてであるから、図一の①④⑦の場合に当る。まず、⑦は意味的に関係がないのであるから、当然、異なる形態素となる(例えば、「書」と「輸」)。①は意味が同じなのだから、当然、同一形態素となる。次に④であるが、

結論を先に述べれば、④の場合には一つの形態素にしようと、二つの形態素にしようと記述の繁簡には影響がない。その理由を次に述べよう。

言語の記述に当たって、個々の要素を列挙するやり方、例えば、「不・很・最・都……」の直後に「飯・面・桌子・石頭……」は現われないが、「好・快・高・遠……」は現われる、といったやり方よりは、「不……」などを「副詞」という類にまとめ、「飯……」などを「名詞」という類にまとめ、「好……」などを「形容詞」という類にまとめて、「副詞」の後に「名詞」が現われることはないが「形容詞」が現われることはある、のように記述した方が、はるかに簡潔であり、規則性を明示することができる。つまり、記述の簡潔性・規則性の明示のためには、個々の要素を列挙するのではなく、なんらかの基準でそれらの要素を「類」にまとめ、その「類」を以て記述することが必要なのである。単語は普通「品詞」という類に分けるが、この場合「一語多類」という現象、例えば、「研究」が動詞としてもリストされ、名詞としてもリストされるという現象がある。この場合、*yanjiu* という形式を一つの単語と考えても、二つの単語と考えても、文法の記述の繁簡には関係がない。要するに、「動詞」という類に「研究」がリストしてあり、名詞という類に「研究」がリストされていさえすれば、それでいいのである。形態素についても、単語と同じことが言える。まず、次のような形態素があるでしょう。

イ 動詞的機能をもった類——信・集・害・去・買
ロ 名詞的機能をもった類——信・集・害・飯・風
考えられる整理の仕方には、次の三つがある。〔註一五〕

- a イに属するもの、ロに属するものを、それぞれ別の形態素とする。
- b イ・ロの双方にまたがるものを一つの形態素とし、それがイ・ロに分属するものとする。
- c イ・ロの双方にまたがるものを一つの形態素とするが、一つの形態素は一つの類にしか属さないとする。この結果

は次のような三類となる。

- 1 動詞的類——去・買
- 2 名詞的類——飯・風
- 3 動詞・名詞的類——信・集・害

a・bの場合には、二つの類で間に合うのに、cの場合には三つの類となるが、1あるいは2の機能しか持っていないものと、1および2の両方の機能を持つものとを分けて示すだけで、3に1および2には見られない第三の機能が存在しないかぎり、かえって記述を繁雑にするだけで、好ましくない。とすれば、aがよいかbがよいかの問題となるが、文法は「類」を以て記述するのであるから、前述の単語の場合と同じように、aでもbでもよいのである。〔註一六〕ただ、図一で「関係あり」と「同じ」がかみあっているのは②と④であるが、②を同一形態素としたからには、④も同一形態素とする方が、若干の説得力があるように思われる。〔註一七〕

なお、念のため一言しておく、ここではただ単に説明の便宜上、「動詞的類」「名詞的類」のような類を示しただけで、形態素をどのような類に分けたらよいのかは、非常に困難な問題である。〔註一八〕 Harris のように、所謂「自由形態素」については、あたかも「品詞分類」であるかのような分類を行い、接辞以外の「拘束形態素」(“soci(-ely)”, “nat(-ive)”)については、S類(stem類)に一括所属させる分類には、語と形態素間の混乱が見られる。〔註一九〕統辞論の単位を語とすれば、形態素は造語法の記述に都合がよいように分類しなければならないと思う。どのように分類するかはともかく、「類」を以て記述するという原則にvarietyはない。

二の3と4を比較してみると、中国語の場合、3の方が量的には優勢のように思われるが、質的な面での重要度は低いことになる。ただ、「的」のように具体的な意味(語彙的な意味)をもたず、抽象的な意味(文法的な意味||機能)しかもたない形態素については、「類」を以て記述することは困難で、個々別々にその機能を説明する必要がある。それは、日

本語の「で」を「格助詞」という類で記述しても大して意味がなく、どうしても「が」とか「に」と區別して、個別的に記述する必要があるのと平行する。したがって、「的」のような形態素は、機能に応じていくつかの形態素に分けたほうがよい。

五

さて以上、述べてきたことをふまえて、もう一度、図一について検討してみる。⑥については、いま適当な例が思い浮かばないが、③あるいは⑤さえも異なる形態素と認定した趣旨から考えて、⑥も当然、異なる形態素としたほうがよい。そうすると、同一形態素と認定する場合は①②④であり、異なる形態素と認定する場合は③⑤⑥⑦⑧⑨である。この事実をもう少し深く検討してみると、次のような規則が浮び上ってくる。すなわち

a 音と意味の、すくなくともどちらか一方が「関係なし」という条件を満たしている場合には、異なった形態素となる。

b 音と意味の、すくなくともどちらか一方が「同じ」という条件を満たしていなければ、同一形態素とすることはできない。

この a・b は、中国語における形態素認定の種々のケースを検討した結果として出てきたものであるが、言語は整然とした体系をなしていると予想してよいとすれば、a・b という簡単な規則で、中国語の形態素の認定ができるということ、この論文での形態素認定の方法は妥当なものである、と考えて差支えないのではなかろうか。

註一：C.F. Hockett: *Linguistic Elements and their Relations*, Lg. 37, p. 29 (1961) を参照。中国語の形態素を論じた日本における論

文として、大河内康憲「Morpheme について——構造主義による一つの問題」〔中国語学一三八号、一九六四年二月〕がある。

註二：単語は心理的存在であるから、ある場合には曖昧さを免れない。それを確かめるために、前後に息の切れ目をおけるか、中間に他の要素を挿入できるかなどの手順が適用されるが、まだ完全な手順は見出されていない。

註三：例えば「yifu」(衣服)は、音節に分割した場合も形態素に分割した場合も、ともに「yi-fu」となる。日本語の「kaku」(書く)

は、音節に分割した場合は「ka-ku」、形態素に分割した場合には「kak-u」となり、両者は一致しない。英語でも、例えば「socialism」、「socialist」について考えてみれば、両者が一致しないことがわかる。

なお、音節をなさない形態素としては、接尾辞「兒」および次のようなものが考えられるであろう。

zhei (這) zh+ei

nei (那) n+ei

nei (哪) n+ei

この場合「ei」は「なにかを指す」という意味をもった形態素。

註四：この論文を通じて、声調を示さなくても誤解の生じるおそれがない場合には、声調の表記を省略する。

註五：註一の二九—三〇頁参照。

註六：註一の三二頁参照。

註七：藤堂明保「中国語音韻論」四九頁参照。

註八：Hockett: A Course in Modern Linguistics, 33節, Types of Alternation を参照。

註九：形態素は、対立関係を示すことのない形態から成り立っているものであるが、特定の形態素の成員である形態は、またその形態素の異形態でもある。

註一〇：形態素の認定に、通時的観点が混入することは好ましくないと考えられるが、言語は歴史的所産であるから、成立の歴史的条件を無視できないと思う。

註一一：「看」「瞧」は、「看病・瞧病」「看見・瞧見」など多くの場合に自由変異をなすが、音素の場合と異なり、形態素に完全な意味

での自由変異があるだろうか。「知的意味」は同じでも、スタイルとか方言の違いとかを考慮すると、同一と言えなくなるのではないか。なお「看顧・看齐・看台・看客」など少数の例では、相補的分布をなす。しかし、「瞧看・瞧門」という二例では最小の対立をなすとすべきかもしれない。「和」「跟」「与」については、「与」は明らかに文言的であるし、「和」と「跟」についてもスタイル上の区別がある。例えば、「討論、検査和改進生産計画問題」の「和」は「跟」におきかえられない。一般に演説などでは「跟」を使用せず、「先生に向って……」というときには、「和」を使用しない方がよい〔倉石中国語辞典〕。

註一二：もし、一つにまとめると、それは所謂“intersecting phoneme”をなす。註八の一一六頁参照。

註一三：同じように②に属するといっても、兒化および連調変化は、異読のイ（「誰」など）と性質が異なる。前者は所謂“sandhi”という現象に属する。なお、所謂「半上声」は明らかに〔214〕〔33〕と相補的分布をなすから、異音として処理すべきである。

註一四：趙元任は「北京語の連調変化はあまり複雑でないので、形態素の状態を複雑にして音素の状態を簡単にしても、あるいはその逆にしても、どちらでもよい」と言っている〔語言問題、六四―五頁〕。

註一五：Z. S. Harris: From Morpheme to Utterance; RIL, p. 144 を参照。

註一六：Z. S. Harris も「首尾一貫しているかぎり、同一形態素とするか異なる形態素とするかは、名称の問題であって、重要なことではない」と言っている〔Structural Linguistics, p. 258, fn. 29〕。

註一七：E. A. Nida は、同音形式のうち、意味に関係があって相補的分布をなすものを二つの形態素とするならば、(一)繰り返しが多くなる、(二)他のいかなる形式とも部分的な音声的・意味的相似を示さない形式」という形態素の定義と矛盾する、と言っているが〔The Identification of Morpheme; RIL, p. 267〕、(一)については、文法は「類」を以て記述する、という観点から納得できないし、(二)については、形態素をこのように定義しなければならないという必然性はない。

註一八：「形態基」という概念は、図一の⑤に当たる形態素（古代漢語の場合には語）の親概念であると思う。しかし、これは文法的な「類」ではなく、語彙的な類である。

註一九：註一五の一四五―一六頁参照。かれの分類では、“be”は五つの類に、“make”“want”は三つの類に、“en”は四つの類にそれぞれ現われるというように、所謂「跨類」が非常に多い。

呂叔湘もまた「形態素分類の問題は、基本的に品詞問題である」と言っている〔中国語文、一九六二年一月号、四八九頁〕。